

# 第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (V)

——А.И. Черепанов : Записки Военного Советника  
в Китае——を中心として

滝 本 可 紀

On the Role of Advisers of Comintern in the Period of the First  
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (V)

Yoshinori TAKIMOTO

## Abstract

"If there is an army, there is power" was relevant to the Chinese conditions of that time. Sun Wen founded a military academy on Whampoa Island not far from Guangzhou. Here command personnel for the National Revolution Army were trained.

Classes began in the academy on 1 May 1924. The opening ceremony took place only 15 June. Sun Wen, Liao Zhongkai, Borodin, Wang Jingwei and Hu Hanmin came from Guangzhou to attend. After Chiang kai-shek's return from four months in Soviet Union, he became the head of this academy, aided by a corp of Soviet advisers.

1924年1月、国民党第一次全国大会が広州で開かれ、「連ソ、容共、労農援助」の三大政策が決定された。また党組織もこの際、大幅に改組された。ここに、孫文の三民主義を実現するための方針、組織は生れたのであるが、当時の中国の軍閥時代にあっては、これを守るための自己の軍事力が必要欠くべからざるものであった。従来までの親孫文と思われた軍閥の軍事力に依存することは、既に事実が示しているように極めて不安定なものであった。

国民党一大会の結果、国民革命軍の基幹将校を養成するために、広州近郊の黄埔島に軍官学校が設立された。孫文を総理とし、校長には孫文の指令でソ連に赴き軍事制度を学んできた蒋介石があたり、党代表は廖仲愷、政治関係の教育には汪精衛、周恩来、軍事教育は何応欽、尚、これに加うるに、ソ連の顧問達であった。

このような中から生れた黄埔軍官学校の卒業生は国民革命軍の基幹将校となり、軍閥軍と戦い相次ぐ勝利

を収め、国民党の軍事的基盤を確立した。また、この軍官学校のスタッフの構成が象徴しているように、ここから将来の人民解放軍、中華人民共和国の幹部も生れた。

以下の全文は当時のソ連軍事顧問、А.И. Черепанов の Записки Военного Советника в Китае (1976 Москва, Издательство "Наука") の中の 102 頁より 135 頁のメモワールの全訳である。

## 黄埔軍官学校

革命の広州で、我々は Бородин や士官学校時代の同志 Яша Герман と Володя Поляк に会った。彼らは国民党大会に係わる激務で多忙であった。

Бородин はめっきり痩せ、髪には白髪が混じっていた。そこでは、色々な質問をしたり、長時間話し合いをするどころではなかった。我々はすぐに事件の渦に巻き込まれ、彼らの仕事に加わった。

映画のごく短いエピソードの中に出てくるように、心配そうな様子の瞿秋白が私の前にちらりと姿を見せた。彼とはモスクワですでに知り合いであり、彼はそこで、北京の新聞、晨報の特派員として滞在し、我々

に中国語を教えた。

当時、運命が組織的にはまだ小さいグループであった中国共産党の最初の指導者達の中の実にすばらしい人々を我々に引き合わせた。勿論、我々はその時、彼らのことをほとんど知らなかった。知っていることといえば、この方面のことに詳しい友人が知らせてくれた個々の断片的な情報にすぎなかった。これらの人々は私達にとって、開かれざる、未知の、すばらしい本のままであった。彼らの活動の詳細を知るようになったのは好きになった中国に関するあらゆる事を念入りに、長く研究してからであった；人生におこる出会いの中で最も興味深いものの一つに対して、表面的にしか対処できなかったことは今思っても残念である。無論、その人達と我々とがよく知り合えなかったのは仕事が極端に忙しかった所為だけではなく、またそこには言語の“バリア”があった。もっとも、瞿秋白の場合はこのバリアは無かった。彼は一生の36年間に信じ難いほど多くのことを成し遂げた。

瞿秋白は20歳の時、中国の誠実な全革命家が従うべき、最も重要な指導原理を理解していた。その原理とはロシアの経験、ソビエトの経験を細心に、全面的に研究することこそ、祖国中国の幸せを求める真の闘いの鍵である、ということであった。

瞿秋白は中国の共産主義者達の中で最大の指導者と考えられた北京大学教授、李大釗の指導の下に自己のイデオロギーを深めながら、貧しい学生生活を送り、日夜衰弱し、若くして結核にかかるまで努力してロシア語を学び、それを完全にマスターした。彼は中国の新聞、晨報の最初の特派員としてソビエト・ロシアに行き、1921年から22年にかけて歴史的内容が非常に豊富な2年間をモスクワで過ごし、その後の人生のすべてを自分の目で鋭く観察し、正しく理解したものを宣伝することに捧げた。彼の二冊の本は長い間、中国の北に起った社会の大変革に関する知識の唯一の正しい源泉であった。

今、Курск 駅地区に来るといつも、曲りくねったЯуза 川のほとりにゆったりと建っているサナトリウム《Высокие Горы》で彼が治療を受けていたこと、また彼が医者達の禁止を破って我々のもう一人のすばらしい中国の友人あてに一篇の論文を書いたことを私は思い出す。瞿秋白は1920年代、文字通りソ連を飛び回り、自国の革命にとって最も重要なものを鋭い目で捕えようとした。(画家И. Бродскийの筆になる彼のすばらしい肖像画も存在している。)

瞿秋白はクレムリンの回廊で、レーニンと会談している。彼はマヤコフスキーに新しい中国文学について詳しく語っている。当時、彼はすばらしく明確に、このソビエト最大の詩人の才能を高く評価していた。彼はЯсная Полянаに行くことを願い出た。彼は数多くの翻訳を行った。その中にはブーシキンからゴーリキーに到るロシア古典文学の傑作、新しいソビエト文学作品、政治上の記録及び書籍があった。

ところで、インターナショナルの歌詞を最初に中国語訳したのは瞿秋白であった。1935年の夏、国民党の死刑執行人に銃殺された時、彼はこの、人を勇気づける歌詞を歌った。

彼が書いた夥しい通信記事の中の一つに、レーニンの演説が行われた“Электросила”工場の労働者の集会の模様を書いたものがある。今や、被抑圧者の最初の保護者となった銃を持つ人について語った最初の有名なレーニンの演説である。

1920年代、中国に於ける我々顧問団の危険且つ必要な活動の事を瞿秋白は充分知っていて、度々レーニンのこの言葉を思い出したであろう、と私は信じたい。というのは、我々は皆レーニンの言う《銃を持つ人》であり、国際主義者であり、外からやって来た全く新しいタイプの軍人であり、それはこの数十年間、中国人が抱いていた観念を根底から打ち砕くものであった。

確かに、瞿秋白は実に興味深い人であった。当時、彼は上海で非常に重大な仕事のため多忙であった。それは共産主義者によりコントロールされる、革命の基幹要員養成のための最初の大学を指導することであった。《5・30運動》が燃え上った時、《熱い血》という、その新聞の編集者に完全にふさわしい性格の名称を持つ新聞を発行し始めた。瞿秋白は広州で行われた中国共産党第三回大会に於いて、自分がすでに統一戦線の原理を支持し、確信する者であることを明らかにし、党内で活発に活動した。国民党第一回大会で、彼は国民党中央執行委員会候補に選出された。彼は共産党の数多くの出版物を編集した。その中に、中国共産党理論機関誌《嚮導》(案内者)があった。彼はまた、農民運動の指導者養成コースで教えた。

孫文は地方軍閥を南中国の革命政府に従わせるだけの現実的な力を持っていなかった。広東の住民の、昔からの革命の伝統、及びこの省の政治的、経済的自立性に立脚し、自己の革命路線を粘り強く遂行するために彼が為し得たことは単に、南方と北方の軍閥間の矛盾を利用することであった。

広州でのブルジョアデモクラシーの政府はその本質上、反帝国主義的であった。孫文は広汎な人民大衆の希望を実現しようとしていた。この点で、彼を積極的に支援したのは共産党員であった。彼らは政府が外国の帝国主義及び国内の反革命に対して、より徹底して闘いを進めるように努力した。孫文は当時の中国の状況の下で、《軍隊のあるところ、権力あり》という金言の正当性を正しく評価し、広州にほど近い黄埔島上に軍事政治学校を創立した。これは国民革命軍の基幹将校の養成機関となった。

国民党大会が終って間もなく、Бородин は孫文の所へ我々と一緒に出かけるため、我々を自分の所へ招いた。

指定された時刻に、Бородин、瞿秋白、Николай Терешатов、Яков Герман、Владимир Поляк と私は孫文の家まで車でいった。孫文は極めて忙しかったにも拘らず（というのは大会が終ったばかりであったから）、我々を迎える時間をとってくれたことは彼の特徴をよく表している。

孫文が軍事委員長、程潜將軍との会談を中断して我々を迎えに来たこと、伝統的なセレモニーなしで握手したことから、形式的で勿体振った気持ではなく、彼の誠実で暖かい友情が感じられた。中山服を着た有名な孫文のポートレートが正確に彼の風貌を伝えている。彼は我々との会談で、中国の独立の主要な敵は帝国主義である、としきりに強調した。国内の敵、即ち軍閥等は帝国主義者の支援を受けて初めて存在するのである。何故、彼は我々にこのようなことを言ったのだろうか。というのは、帝国主義に対して闘うよう我々をアジテイトする必要のないことを、孫文は知っていたからである。最後の外国の干渉者がソビエト極東地域から永遠に追い出されたのはわずか2年前であった。それにも拘らず、孫文は我々との会談を帝国主義との闘いのことから始めた。当時、このことが彼にとっては最大の問題であった。

我々が南中国の軍隊の再編成に係わる仕事を始める前に、孫文は我々と会った。彼は中国の革命軍は帝国主義者と衝突せざるを得ないと予見し、戦闘行為に備えて軍隊を訓練する際、この予見を考慮に入れ、あらゆる軍事的侵略に対して反撃できる軍隊を創り上げたいと思っていた。

一我々の第一の課題は一と孫文は述べた、一ソビエトをモデルにして軍隊を創り上げ、北伐ための基地を用意することである。

これらの言葉にはまた、深い意味があった。情況は

全く珍しいものであった：ブルジョア革命家が自分達の軍隊を基本的に赤軍と同じものにしたい、という希望を表明している。だが、重要なことは、孫文が多くの点で通常のプチブルジョアの革命性を越えて、彼流に理解した社会主義に向かったことである。

その後、我々は次のような確信を得た。孫文の言う《ソビエトをモデルにする》という考えは孫文にとっては、単に、自己の軍隊が赤軍の採用している組織原理に基いて創られ、それが赤軍の戦術的思想を持つようになるのを見たい、というだけでなく、自己の軍隊に人民的性格を付与する意図を表明したものである。勿論、問題になったのは労働者—農民軍ではなく、統一民族戦線の軍隊であった。

孫文は次のように述べている。諸君は外国の帝国主義者の干渉に対する闘争によって、豊かな経験を積み、彼らを自国から追い出した。その経験を我々の軍官学校の生徒、即ち革命軍の将来の士官に伝えてくれることを我々は期待している。

孫文のレセプションの後、Бородин は蔣介石を我々に紹介する、と約束した。彼は軍官学校校長の地位に任命されることになっていた。当時は孫文自身が軍官学校の校長になると思われていた。蔣介石との会見は我々にはよく解らない理由で、いつも延期された。その後蔣介石がどこかへ行ってしまった、とБородин から知らせがあった。我々に真実を告げなかったのは恐らく、将来の首脳部の権威を我々の前で傷つけないためであったろう。実際は、蔣介石は孫文や廖仲愷に知らせずに、黄埔軍官学校は開校されないと宣言し、学校のために集められていた教職員に退職金を払い、自分は上海に姿を消した。この人物が姿を消したことは恐らく、彼が当時、軍官学校の校長という地位を得ることが大資本家にとっても彼自身にとってもいかにすばらしい宝であるかを、まだ十分理解していなかったことを物語っているであろう。彼は疑いもなくコミニストの革命的権威を恐れていた。それ故、校長の地位は当時、彼には異に思われた。

蔣介石がこのような行動をとったのには、もう一つの理由があった。それは呉鉄城將軍が正しく指摘しているように一私にはそう思える—よくある臆病の所為であった。蔣介石が恐れていたのは広州に存在する軍閥、特に雲南軍閥であった。彼らは黄埔軍官学校の設立に冷い目を向けており、軍官学校生徒を武装解除し、最終的には彼らを処分するつもりであった。

吳鉄城はБородин に次のように語った。《この臆病者

は執着するだけの価値がない。雲が濃くなり始めるや否やいつも、蒋介石は自分を危険に晒さないために逃亡し、どこか危険の無い場所に身を隠した。彼は今回逃げ出したと同じように、将来もまた逃げ出すであろう。彼を当てにしてはならない。》この言葉から明らかなように、国民党右派でさえ蒋介石の正しい本質を見抜いていた。

孫文、廖仲愷、及びコミュニスト達は蒋介石の指令を取り消した。そして軍官学校は機能し始めた。間もなく、蒋介石は自分よりも状況をよく理解していた《取引所の政治家達》に促されて、自分の地位に戻るのが好ましいと判断した。

当時、我々は勿論、蒋介石の政治家としての真の姿を知らなかった。我々は単純に、蒋介石の政治上の指導者は孫文である、と思っていた。実際は、蒋介石は上海のギャングの親分である陳其美に《学んでいた》。彼は後に国民党の反動派のリーダーにのし上った陳立夫、陳果夫兄弟の叔父であった。

蒋介石は浙江財閥の利害を代表していた陳其美派の指導の下で、政治的訓練を受けた。蒋介石は政治生活が始まったばかりの時に、死刑執行人の役割を演じた：1912年、他ならぬ彼が勝れた革命家 Tao Chenzheng を殺した。この人物は浙江の権力を求めて突き進んでいた陳其美やその子分達の前に立ちはだかっていた。蒋介石の予想に反して、彼は Tao Chenzheng を卑劣にも殺害したことによって政治上の頂点に達することは全く無く、唯単に、浙江の陳其美のライバルの一人を除去したにすぎなかった。1911年革命の後、蒋介石は上海のギャングの仲間になり、金儲け、乱痴気騒ぎや放蕩の生活を送り、また南方の軍閥や山賊の仲間になった。これらの徒党が通る所はどこでも、略奪、暴行、殺人が支配した。

蒋介石はしばらくの間、買弁仲間の上海の取引所の仲買人として活躍した。そして取引所の相場師から学び、大した実業家になった。しかし、運命に見捨てられ、彼は経済的に破産した。1922年、上海の取引所に不況が始まり、辣腕家達にとって良いことは何も予想できなかった。そこで、蒋介石は政治的投機によって富を得ようと決めた。出世第一主義者の蒋介石は自分が革命的であることを色々見せかけ、孫文の思想を心から信じている、といつも長々と自ら進んでしゃべった。そして恥知らずのデマによって孫文に取り入り、信用を得ることができた。

孫文がソ連との友好関係を打ち立てた後、蒋介石は

自分の政治資本を築くために、巡ってきたチャンスを利用した。彼は軍事組織の研究のためにソ連へ行くことに同意した。正にこの訪ソの結果、さらに国民党縁故のお陰で、蒋介石は自分に大きな利益が約束される地位、即ち黄埔軍官学校の校長の地位を得た。

蒋介石は校長に指名される前、許崇智將軍のもとで《給与》を受け、何とか暮していた。許將軍は彼を名前だけの参謀次長や参謀長に任命した。その後、彼は孫文のもとでも、名前だけの参謀長になった。当時、彼の支えとなっていたのは二人の従兵と二人の女で構成された《軍隊》であった。かくて、蒋介石は彼の軍事一政治経歴の最初から、二枚舌であることを示していた。一方では、革命的美辞麗句を利用し、自分を孫文の支持者に加え、他方では、袁世凱流のクーデターを自分も行なおうと秘かに夢見ていた：黄埔軍官学校を基礎として、新しい陸軍を創設し、その助けて国家権力に入り込もうとした。

広州軍の中で孫文に最も忠実な師団をベースに、国民革命軍を創ろうという提案に対して蒋介石が執拗に反対した理由は明らかである。

すでに述べたように、我々は蒋介石の過去は知らなかったが、彼には何ら共感するところが無かった。蒋介石に会うといつも、我々は警戒心が呼び起こされた。

1924年5月にすでに、蒋介石は廖仲愷当ての手紙の中で、孫文の三つの政治方針に反対だと言明し、ソ連を中傷し、廖仲愷を嘲笑して《ロシアの奴隷》だと言った。

勿論、この事を Бородин も知らなかった。黄埔軍官学校は蒋介石に大きな可能性を与えた。だが、この狡猾な陰謀家は共産党の援助が無ければ軍官学校を創設することも、軍隊を組織することもできないことをよく知っていた。

かくて、我々は黄埔軍官学校の軍事顧問に任命された。仕事を始めるにあたって、Терешатов, Поляк 及び私は Бородин の家に招待され、そこで蒋介石、学科部門主任王柏齡と訓練部門主任の何応欽に引き合わされることになっていた。

蒋介石は当時、40歳くらいであった。短かく切った薄い髪が小さい頭に突き立っていた。意地悪そうな目が不安気にきょろきょろ動いていた。彼は見るからに気取り、いかにも軍人風な態度で振舞った。Бородин の言うことに耳を傾けながら時々、同意の印として鳥の鳴き声を思わせる、何か意味のない声を出した。彼の笑いには作った様な響きがあり、目は相変わらず意地

悪そうだった。

王柏齡將軍は中年の、とても痩せた人だった。丸い額、尖った顎、話をする時歯をむき出したり、話す相手に指が広がって半ば曲っている右手を差し出す癖が目についた。その様子は苦しめられた小猫が予想される危険の方へ驚いて手を差し出すのに似ていた。札付きの保守主義者であり、鈍物である彼はずっと以前に時代遅れになり、不要となった何かをいつも守ろうとしていた。

何応欽將軍は椅子の端に板のように真直な姿勢で坐り、膝の上にきちんと手を置いていた。彼の短い、《立毛の織物のような》ヘアスタイル、金縁眼鏡の奥の強い近視の目、笑う時、開かない薄い唇、少し左肩が持ち上った彼の姿全体を見ていると、最前列から我々の前にやって来た真面目な生徒のようであった。実際は、彼は偽善者 Головлёв であり、しかもそれは大したものだった。

我々は首脳部との会見の後すぐに、我々の仕事の場所へ到着した。学校の建物、顧問達に割り当てられた住居を調べるとすぐ、将来の演習場を探しに出かけた。

小さい自然の演習場を通り過ぎた時、我々は思わず笑った：かつて、ツルゲーネフの前で飛んだと同じように、我々の前で《雀の一家族が夏の太陽を浴び、全て黄金色に輝き、一列になって飛んでいた。機敏に、可笑しく、生意気に飛んでいた。》それは全くモスクワと同じであった。雀がここで生きている以上、我々は大丈夫だ。悲しい思い（《とんでもない所へ来た》）はすぐに消えた：《我々は闘ってみせるぞ、畜生》

我々は闘った。

黄埔島は広州から 25 km 離れた珠江の中にあった。かつて、そこは砦となっており、中国の貿易の中心都市へ海から接近して来るのを防いだ。その要塞は 1870 年、《鴉片》戦争後に築かれた。まだそこには当時の沿岸砲が残っていた。それらは昔の通り、発火薬を用いており、列強の近代的艦隊に対しては全くの無力であった。守備隊は世襲の兵から成っていた。祖父から四世代、勤務していた。最初に召集された兵の中の、70 歳になった老兵が自分の子供や孫に指導的な砲兵の地位を譲りたがらなかった。彼らは目がよく見えないにも拘らず、照準手であった。彼らの子供や孫が砲手になり、曾孫が将校の走り使いをしていた。同じような守備隊が珠江デルタにある、隣の虎門の要塞にも存在していた。彼らの給料は非常に少なく、その上、不規則であった。彼らは常設砲台のすぐ傍にある菜園の上

がりで生活していた。

学校が島の上にあったために、予期できない、不快な事を大いに避けることができた。丁度、川カマスが小さな魚を飲み込むように、何らかの《連合軍》がそれを飲み込んでしまう危険を無くすることができた。少なくとも最初の間、不必要な観察者から学校を隠すことができた。

学校の授業は 1924 年 5 月 1 日に始まったが、正式な開校式は 6 月 15 日になってようやく行なわれた。これを機会に、広州から孫文、廖仲愷、Бородин、汪精衛、胡漢民がやって来た。軍官学校の生徒を前にして孫文が最初に演説をした。孫文は帝国主義者、及び国内のその手先—封建軍閥との武装闘争の必要性を説いた。彼は自己の政治原理を詳しく説いた。正確に、単純に話し、わざとらしいジエスチャーも無く、全く気取らず、また何のメモも持たず話した。聴衆は身じろぎもせず、彼の言葉を一語一語貪るように聞き、吸収した。

このすばらしい演説のほぼ全文を引用しよう。というのは、この演説が孫文によって創られた国民革命軍の基本方針となったからである。そして後でわかる様に、軍隊、もっと正確に言うと、その中で最上の、最も鍛練を受けている部隊が極めて複雑な政治的、軍事的状況の中で、その方針に基いて指導され、数に於いて勝っている敵を何度も打ち負かした。

《尊敬すべき来賓、教員、学生諸君、本日が軍官学校は活動を開始した。どのような目的で我々はこの学校を創設したか。諸君も知っての通り、辛亥革命からすでに 13 年の月日が過ぎ去ったが、今日まで我々は単に中華民国の《存在》の年を刻んだにすぎず、真の意味でのそのようなものは全く創られていない。かくて、中国に於いて革命が遂行されて以来 13 年間、我々は単に看板を手に入れただけであった。このことは過去 13 年間、中国革命は何らの成果も上げなかったことを意味している。》

中国に革命が起ってから後、世界革命の戦線の状況はどうなったか。6 年後に隣りの国、即ち中国と 5,000 km 以上の長い国境線を共有し、世界の二つの大陸—ヨーロッパとアジア—にまたがり、中国よりももっと巨大で、ヨーロッパ大戦前、世界で最強であったその国に、戦争の途中で革命が勃発した。諸君は私が隣のどの国のことを言っているのか、と質問するであろう。ロシアの事である。ロシア革命は中国革命の 6 年後に起ったが、それは完全に成功裏に終わった。

二つの国の歴史を比較してみよう。中国に於ける革



命は外からやってきた満州族に向けられたものであった。清王朝の満州皇帝の威信は我々の革命の頃は極めて低く、汚職が国家機構を腐食していた。清国は世界で最も老衰した国であった。一方、皇帝権力に対する革命の時期のロシアの状況はどうであっか。ロシアの場合、皇帝はロシア人であり、ロシア教会の長でもあり、彼の威信は国内に比べるものがなかった。革命前、ロシアは世界で極めて強力な国家であった。この比較は中国に於いては、革命が非常に弱い権力しか有していない皇帝に対して行われたのに対し、ロシアでは、強力な権力を有している皇帝に対して行われたことを示している。これは国内の状況の観点から言うと、中国革命を行うことの方がロシア革命を行うことより容易であったことを意味している。外的な条件について言うと、ロシアの革命はその進行中に、外国人側からの大きな障害に出合ったが、中国の革命には外側から干渉は何もなかった。辛亥革命の前に、外国人は中国の分割について時々話題にしたにも拘らず、そしてまた、革命の開始と同時に列強の干渉が始まるのではないかと恐れたが、革命が起った時、列強は眉さえも動かさなかった。ロシアの方は口先だけでなく、行為でも武力干渉を受けた。ロシア国内に侵入した軍隊の構成は英国、米国、日本、イタリア、その他いくつかの小国の軍隊であった。外国人はロシアへの干渉のために、世界中の力を結集した。このように、我々の革命に対立したのは国内の単に弱い政府だけであったが、ロシア革命に対しては国内の強力な政府、外からの全世界の強大な列強が立ちはだかった。それ故、外的な条件という観点からしても、中国革命の遂行はロシア革命の場合よりもはるかに容易であった。

ロシアはそれ程大きな困難にぶつかり、それ程多くの敵と出会いながら、一体、何故、6年間ですべての障害を完全に克服でき、ロシア革命を最終的な勝利のうちに完遂させることができたか。一方、我々の革命はその二倍の期間続き、その過程での障害もより小さかったにも拘らず、我々は現在まで成功をおさめることができない。中国革命とロシア革命の帰結の比較、両者の帰結が非常に異なるものになった理由の解明は我々にとってすばらしい教訓となった。これを教訓として、我々は今日、この学校を開くのである。

我々が学んだ教訓の意義は何か。それはロシア革命の場合、皇帝に対する闘争の前衛は革命党員であったが、革命が成功すると先ず、すぐに革命軍を創設した。ロシア革命党はその後の闘争に於いて、革命軍の支持

に依存したので、途上の全ての障害を克服し、完全なる勝利をおさめることができた。中国革命の首唱者もまた党員であった：広州で戦った人々の中で71人の戦死した英雄が最も有名であり、また少なからぬ党員が他の省でも、革命の事業のために自らの生命を捧げた。こうした英雄の戦いのお陰で武昌蜂起は他の諸省での反響を呼び、その結果、清朝は倒され共和国が宣言された。

我々の革命は部分的な勝利をおさめた。しかし、革命が部分的に成功したにも拘らず、その後、国内に革命党の理想を実現するための闘争を続けることを可能にすることができたであろう革命軍が存在しなかったがために、軍閥や官僚がのさばり、今や、中華民国を自分達の都合の良いように変えている。民国には頼るべきものがない。もっとわかり易く言うと、我々の革命のために革命党のみが闘い、革命軍の支援が無かったことでこのことは説明できる。我々が革命軍を持たなかったために、官僚や軍閥が民国を利用し、支配することになり、我々の革命は完全な勝利に終らなかった。

我々は何を求めて、今日この学校を開設したか。我々は今日から革命の事業を復活させ、この学校の生徒を中核として革命軍を創設したい。軍官学校生徒の諸君は将来の革命軍の中核である。このようなすばらしい中核をもって革命軍を創り上げたなら、我々は革命を完全な勝利に導くことができるであろう。勝れた革命軍が無ければ中国革命は永遠に成功しない運命にあるだろう。それ故、この軍官学校を創立するに際しての唯一の期待は中国を破滅から救うための革命軍を創設することである。

そもそも、革命軍とは何か。諸君はこの学校で学ぶ際、革命軍の戦士になるためにはいかなる目的を持たねばならないか。革命の戦士と呼ばれる権利を持つためには、どのような資質を養わねばならないか。革命軍がどのようなものであるべきかを理解するには、革命の事業のために倒れた我々の英雄達を手本にし、また革命闘争のやり方を革命党から学ばなければならない。革命党が闘ったように闘う軍隊のみを革命軍と呼ぶことができる。

中国革命の13年間、全期間を通じて革命党と同じように闘った軍隊は我々には一つも無かった。この13年間、中国には革命的と呼べるような軍隊は存在していなかった、と私は敢て言いたい。現在、広東には大ざっぱに言ってかなりの軍隊が我々革命党と共に闘っ

ている。だが、私はそれらを革命軍と呼ぶことはできない。これらの軍隊が我々革命党と共に活動しているにも拘らず、一体、何故私はそれらを革命軍と呼ぶことができないのか。なぜならば、それらの構成は雑多であり、革命的訓練を受けておらず、革命的基礎を有していないからである。革命的基礎を持つとはどういう意味か。革命のために倒れた英雄のような人間になれることが即ち、革命的基礎を有することである。現在、広州で戦っている兵士達について言うならば、倒れた英雄の行為は今の所、彼らには全く理解できないことである。その上、貧困が中国を支配し、生きるための資力を見出すことが極めて困難である現在、これらの人々は行き場所が無く、貧困に駆られ、家族に対する配慮を負わされて、進んで革命のために闘っている。ある程度、自分の生計を立てることに成功すると、彼らは今まで従っていた革命原理をすべて忘れ、二度とそれに注意を向けなくなる。このような理由で、二年前、当時我々の革命の同志と思っていた陳炯明の兵士達が Guanyinshan を攻撃し、南方政府を打倒するようになった。革命的と思われていた部隊がそれらの利害関係が変化すると、同じ革命政府の指揮下にある他の部隊の方へ銃剣を向け、敵ができなかったようなことも成し遂げた。これは次のことを実証している。革命の理想を持たない部隊は結局は、個人のもうけ、個人の利害関係についての考えを捨てることができない。また、その利害関係が革命の利益と衝突するようになると、そのような部隊は直ちに信頼できなくなる。そのために、我々の革命は常に敗北を喫した。

私は今日、諸君としばらく話し合いをするためにここへ来た；私は過去の成功も失敗も全て忘れ、今日から、再び、革命の基礎の確立と私が夢に描いているような革命軍を創設することに着手したい。諸君はこの学校で学ぶために遠方からここへやって来た；諸君も理解しているように、我々の基本的な課題は革命軍の創設にあり、諸君もまたそのために努力しており、革命に奉仕することを願っている。自分が革命に奉仕するためには何から始めたらよいか。自己完成、即ち悪癖、誤った考え、悪い性格一獣的なもの、悪意のあるもの、非人間的なものを全て一に拒絶することから始めねばならない。政治革命を目指す際、自分自身の魂の革命から始めねばならない。もし、諸君が自分自身の魂の革命を実現することができたなら、その時政治革命の望みもまた生ずるであろう。もし、諸君が自己の内的世界をつくり変えることができないなら、たとえ

素晴らしい設備の整った学校で、軍事科学を研究しても、諸君は革命軍の戦士になることはできないであろうし、また革命に奉仕することもできないであろう。それ故、諸君がもし、革命に奉仕したいと願うならば、先ず第一に、革命の目的を明確に把握しなければならない。そうすれば、諸君はやがて革命軍の司令官になれるであろう。

革命の勝利を願うなら、我々は今日から共通の熱意を持たねばならない：個人的な利益でなく、国家と民族を救い、三民主義と五権憲法を実現する闘争のために、全生涯を捧げること。革命への献心的奉仕に自分の全てを捧げること。そのようにしてこそ、革命の目的を達成することができるのである。そうしなければ、たとえ軍隊を創り、一連の勝利をおさめ、広い地域を取り戻し、何千人もの兵員を指揮したとしても、それでも諸君は革命の戦士とはならないであろう。

現在、中国内の悪い軍人は二つのグループに分けることができる。第一のグループは革命陣営内に存在している軍人である。彼らは言葉の上では革命を支持しているが、実際には絶えず、革命に反対した行動をとっている。このような人々は次のように言われている。《唇には蜜、懐にはナイフ》。第二のグループは革命陣営の外にいる軍人達である。このグループに属する軍人は一人残らず革命に反対している；彼らの関心事はただ個人的な利益のみであり、彼らの考えていることは全て共和国の廃止と王朝の復活に向けられたものであった。もし、諸君が将来、民国を支え、こうした軍人を一掃したいと思うなら、諸君は偉くなった後、私利私欲に耽る指揮官や不正直な小独裁者一軍閥には自分ではない、という固い決意を深く懐かねばならない。そのような決意を懐いた時にはじめて、諸君の革命の道で第二のステップを踏み出すことができる。第二のステップとは何か。それは革命のために倒れた英雄を見習うことである。彼らの力は彼らが自分の身も命をも省みず、祖国の利益のために献的に闘ったことにあった。

広州蜂起の時、1対100で戦って敗れた；武昌蜂起では1対500で戦って勝利をおさめた。どちらの場合も絶対少数が絶対多数を相手に戦った。だが、広州では蜂起は敗北に終り、武昌では成功した。つまり、革命闘争は型通りにアプローチしてはいけない。このような闘争の例は中国の内外、古今東西のいかなる軍事操典にも載っていない；ただ革命の歴史の中でのみ、このような先例のない事が起るのである。もし、我々

が今後も絶えず革命の道を進もうとするなら、我々は少数者が多数の敵には勝てない、と主張すべきではない。

我々の教官達は外国の士官学校や保定の軍官学校で教育を受けたが、これらの学校で教えられた軍事学は一般的なものである。そこで教育を受けた教官達は勿論、彼ら自身が以前に学んだことを自分の生徒達に今、教えるであろう。従って、この学校で諸君が学ぶであろう教育課程は大体において、どこでもみられる、最も古典的で、普遍的と認められている軍事知識に限られるであろう。諸君はこれらの知識を習得すれば、革命軍の戦士になれるだろうか。革命の戦士の養成は教育を受けるだけでできるものではない。それは揺ぎない精神的目的追求性の中から生まれるのである。教育の期間、諸君は勿論、教官の講義を聞き、上官の命令に従い、教官の教えることを全て習得しなければならない。恐らく、諸君の中には非常に優秀で、将来自分の教官達を追い越す人もいであろう。だが、特別の才能の無い人でも、ここで教えられることをきちんと習得したならば、将来、大いに役に立つであろう。諸君が現在置かれている条件と、以前革命家達がそのもとで活動せざるを得なかった条件とを比較してみなさい。以前、革命党員は何ら特別の軍事教練を受けなかった。だが、諸君の方はこの学校で少なくとも半年は学ぶことになっている。以前、革命党員はピストルを持っていたに過ぎなかったが、諸君は今や、素晴らしいライフル銃を持っている。以前、革命党は必要な時でも一個所に、最大 200 から 300 の兵員を集めることしかできなかったが、現在では、この学校だけでも 500 人の生徒がいる。このような良好な基礎の上に、さらに真の革命的情熱が諸君に加われば、これらの 500 の兵員と 500 のライフルで大きな革命活動を成し遂げることができるであろう。

過去において、我々は日本や欧米諸国の陸海軍諸学校を卒業した人々を、我々の党へ引き入れようと、絶えず努力してきた。しかし、彼らの多くは党に入ること欲せず、皆、革命に反対するようになった。革命に反対するようになった、これら教育を受けた軍人達を動かしていたものは何か。注意深く調べてみると、彼らは皆自分を軍事の専門家と思い、ある偏見を持っていたことがわかる：我々の党は 1 人対 100 人、100 人対 1000 人の戦いを呼びかけた。軍事教育を受けた人々の観点からは、この呼びかけは全ての国民、あらゆる時代の軍事学とは根本的に矛盾しており、それ故に、文

句なしの敗北への呼びかけであった。この問題をこれ以上論ずる必要は無い。その後革命を成し遂げ、満州清王朝を倒した人々のことを思い出せば充分である。

辛亥革命は軍事を実際に知っている職業軍人の参加なしで成功した。革命というものは特別な事柄であり、通常のものとは異り、常識的な観点からそれにアプローチしてはいけない。諸君がこの学校での教育期間中、どれほど多くの知識を得ようと、もし、それらに革命のエネルギーを付加しなかったなら、それらは役に立たないであろう。革命のエネルギーが無くとも、一生、老いるまで学ぶことができるし、またあらゆる学問を研究することができる。しかし、そのような人は革命にとって無用な人である。

我々は今日初めて、この軍官学校を創立するためにここに集まったのである。だが、北方の官僚や軍閥達はすでにずっと以前から、保定に軍官学校、北京に高級歩兵学校を持っている。我々の学校を彼らの学校と比較すると、彼らの学校は設立も古いし、定員も多い。また素晴らしい武器を持っており、そのような比較は我々にとって不利であろう。比較する際、物質的側面のみに限定し、通常の観点からのみ出発するなら、一体、どのように中国の再建に着手したらよいであろうか。北方の將軍達や兵士達が軍隊を創ったのは、官位や富のためであるか、或いは食料や軍服のためであって、彼らには祖国や人民のことを危惧する、という考えとは全く無縁であり、革命精神とも無縁であった。清朝の支配下の時期の軍隊はそのようであった。曹錕や呉佩孚の時もそのような状態は続いていた。それ故に、我々は以前革命党員の中に軍事専門家がなかったにも拘らず、清朝を倒すことができたのである。今や、訓練を受けた、戦闘力のある革命軍を持って、更に一層確実に、曹錕や呉佩孚を倒すことができるであろう。しかし、現在の状況の下では、曹錕や呉佩孚を倒すには先ず、革命精神の力を身につけねばならない。この力が無ければ、現代的武器を備えた敵の勝れた戦力を我々は打ち破ることができないばかりでなく、我々自身が敗北することを私は懸念している。6 年前、ロシアに革命が起った時、そこではすぐに革命軍が組織され、その後、絶えず前進が続けられていた。まさにこのために、ロシア人は旧制度の支持者や外国から侵入して来た敵を倒し、輝かしい成功をおさめたのである。今、この学校を設立するに当って、我々はロシアの例を見習っている。中国革命後、13 年を経て今、我々はこの学校を設立し、革命軍を創らねばならない、



と感じている。この事実は新しい国家を成功裏に建設するためには、革命軍が絶対に必要であることを証明している。

諸君がこの学校へ学ぶためにやって来て、私の今日の演説を聞いていることから判断して、諸君は勿論、革命軍の戦士たらんと決意している。では、諸君のこの決意を裏付けるにはどのような基礎が必要であるか。そのような基礎となるものは広く、且つ深い知識でなければならない。そうした知識を持って初めて、大きな勇気を得ることができる。大きな勇気を持って初めて、革命軍の戦士となることができる。だからこそ、広く且つ深い知識が基礎なのである。いかなる方法で、これらの知識を得るべきか。広く深い知識を得る方法は単に、毎日教室で教官が教える学問を学ぶだけでなく、個を通して全体を理解し、自己の知識を各々が広げることである。放課後、熱心に軍事教育の自学自習に努め、本を読み、軍事学や革命理論を解明している雑誌や新聞を読まねばならない。諸君が知識を得、物事の本質を十分に理解した後、諸君の内に革命的エネルギーが強まり、革命のために倒れた英雄の事業を続けたいという願望が生まれるであろう。諸君は中華民国の基礎を創るため、三民主義実現のため、ロシアが達成したような輝かしい革命の勝利のために、必要な時には喜んで自分を犠牲にするようになるであろう。その時こそ、中国は世界中の全ての国々と共に立ち、中国は永遠に存在することが可能となるであろう。もし、革命が勝利をおさめなかったならば、4億の国民は滅びるであろう。だが、我々の国家、我々の民族が滅びることは我々の利益とはならないので、諸君はこの危険に対して関わざるを得ない。そのような危険に対抗できるのはただ革命軍のみである。

革命軍は国家と民族を救うために闘っている戦士から成る。そして、諸君はこの将来の革命軍の基幹将校である。諸君には国家と民族を救う義務がある。諸君はそのような義務を負うことになっているので、本日より、以前にも増して知識の習得という戦線で関わねばならず、学校を卒業し、革命軍が組織された時、更に一層献身的に、民国建設途上の障害と関わねばならず、1対100で闘う能力を持たねばならない。

肝要な点は何か。1対100で闘う能力は何に基いているのか。革命軍の戦士になるためには、何を手本にすべきか。簡単に言うと、革命に倒れた英雄の行為を手本にし、そのような人物になることを学び、英雄達のように正義を求める闘争で、自己の生命を省みず、祖

国を救うため個人の利益を捨て去ることができなければならない。そのようになってこそ、恐れを知らぬ革命軍の戦士になれるのである。

もし、一人一人が必要な場合自分の生命を犠牲にすることが幸せだと思ふならば、100人が1万を、1万人が100万人を撃破することができる。我々が今、もし1万の革命軍を持っていたとするならば、速やかに中国に秩序を確立することができたであろう。何故なら、国内の反革命軍は全部でせいぜい100万人ぐらいのものである。だが、我々には1万人の革命軍が無い。その故、不誠実で残酷な軍閥どもがのさばり、国内で横暴を極め、祖国にあらゆる害を与え、民国を打倒する道を執拗に探している。我々の方は民国を守り、これら不誠実、且つ残酷な軍閥どもを打倒したい、と願っている。つまり、諸君は死を恐れず、革命のために命を投げ出した英雄達の道を進まねばならない。更に必要なことは諸君を中核として、私の夢である革命軍を創設することである。もし、この理想的な軍隊が創られるなら、我々の革命は輝かしい勝利のうちに成し遂げられるであろう。中国は救われ、4億の人民は滅びないであろう。革命の事業とは祖国と人民を救うための闘争の事業である。革命の事業に全生涯を捧げた私はこの課題を実現する責任を負っている。また、この学校へ学ぶためにやって来た諸君が今後、私とこの責任を分かち持つことを要求する。》

孫文はその後何度も、黄埔軍官学校の生徒に、ソビエトの経験が彼らにとっていかに重要であるか、を詳細に説明した。例えば、1924年11月3日、軍官学校を訪問した際、彼は次のように述べている：《ロシア革命の成功は100年前に起ったフランスやアメリカ革命よりもずっと深い意味がある。ロシアにレーニンという革命思想家が生まれたことから、これは明らかである。彼は鉄の規律を持つ革命党を創った。この党は巨大な力となり、それによって急速に、ロシアに革命の成功をもたらした。ロシア革命の方法は我々にとって、素晴らしい手本として役立つにちがいない。》

多くの軍人を前にして孫文が行ったこの演説は深い歴史的意味を持っていた。もし、孫文が我国と結んだ関係を一時的な、緊急な、財政的、軍事的援助を必要とした政府の困難な状況から生まれたもの、と考えていたなら、勿論、彼は自分の計画を国民党指導者の狭い範囲、広東の行政、軍事機構の指導者に知らせるだけで十分であったろう。しかし、孫文は自分の最も重要な結論——ソ連との友好の必要性、ソ連の経験を研

究すること、を粘り強く、何度も大衆の前で語った。彼はこの考えの種子を自分の信奉者のできるだけ多くの人々の頭に、広汎な民主陣営の人々に植えつけようと努めた。

商業新聞、雑誌一般、香港の中国部分や租界の資本主義国の新聞雑誌が我々の国や人民について、悪様に中傷記事を書いた事件を思い出そう。確かに孫文は国民党員の中の真の革命分子をこの悪意ある宣伝の影響から守ろうとした。過去において軍閥であった国民党の政治家や将校達は黄埔に於ける孫文の演説に満足したであろうか。恐らくその様なことは無いであろう。というのは、彼らは次のことを知っていたからである。大衆の革命的目覚めの過程は不可逆のものであり、孫文の思想は彼の絶大な革命的権威と共に、聴衆の記憶の中に深く刻み込まれている。黄埔軍官学校が存し始めて数ヶ月の間に、革命的雰囲気がつくられ、将来ここが中国の革命的将校団を相当程度養成する場所になることが可能となった。黄埔軍官学校の仕事があるまま、孫文の下にある広州の我々軍事顧問団の活動の主要内容であった。

孫文に続いて汪精衛と胡漢民が集会で演説した。彼らはいつもの調子で話した：汪精衛は気取り、胡漢民は理屈を捏た。

聴衆に眠気を催させ始めていた、汪精衛の詩の朗読のような演説、胡漢民の退屈な説教の後、軍官学校のコミッサール廖仲愷が機智に富む演説をして大きな興味を呼び起した。

1924年11月1日、黄埔には1500人いた。その中には：教官及び教練将校62人、学校運営要員131人、生徒950人、事務局及び将校の伝令兵120人、サービス関係従業員237人。

孫文との会見の際、6ヶ月間歩兵の教育を行うことをこの学校の基本的タイプとすることが決められた。それ以外に、特別のクラスがあった。砲術(学生60人、教育期間9~12ヶ月)、工兵(学生130人、期間9ヶ月)、通信(学生30人、期間9ヶ月)、補給(学生60人、期間6ヶ月)。定員120人の機関銃クラスには歩兵出身の学生が集められ、全部で20時間の教育課程が与えられた。

その後、学校内に政治養成機関が設立され、公式に中央軍事——政治学校と呼ばれるようになった。

学校内にはまた、ロシア語(25人)、フェンシング、体操のクラスができた。

教官は十分な一般的教養を身につけた将校の中から

集められたが、軍事教育の程度は各人まちまちであった。ある者は外国、主として日本の軍関係の学校を終えており、ある者は保定の、古い中国の軍官学校、或いは各軍閥の私兵の省軍関係の学校を終えていた。

勿論、我々は黄埔に於ける我々の日常の教育の仕事をする際、軍閥の軍隊出身の将校や、言葉の上では孫文の思想を支持しているが、心の底では支持していない国民党員の抵抗に絶えずぶつかった。尤も、孫文が生きている間は、彼が許さないことを知っていたので、公然とは敢て我々を妨害しなかった。孫文の死後、黄埔は革命のセンターとして十分強固なものとなった。それに加えて更に、孫文の死後、2ヶ月半経って、上海のプロレタリアートが始めた強力な革命の高揚(5・30運動)が展開し始めた。

孫文の下での黄埔軍官学校は概して、彼の武装せる、頼りになる存在となった。それにも拘らず、教員の大部分が出世主義——軍閥制度に避け難い帰結——に毒されていたことは相変わらず事実であった。多くの者はこの学校を大きな支配力、或いは小さな支配力を得るための跳躍台と考えていた。そして彼らのうちの何人かは裏切者、蔣介石の側に移り、その後、同胞の血で御機嫌を伺い、待望の目的を達することに成功した。だが、こうした教官達とは異った者もいた。彼らは人民に奉仕しようという、誠意ある願いを持ってこの学校へやって来、この気持を最後まで持ち続けた。

教練関係の将校は比較的素朴で、且つ謙虚であった。後にわかるように、彼らは我々と共に喜んで働き始めた。

生徒は主として、広州、上海、その他の都市の中等学校、大学の学生より集められた。この若者達は前以て学生運動という革命の学校を通して来ており、孫文が具体化した理想のために闘う覚悟が充分できていた。

最初の卒業生の中に39人の коммуニストがいたが、労働者出身の生徒は殆んどいなかった。後に、主として農民や都市の貧民から成る、読み書きのあまりできない義勇兵に対する特別のコースが設けられた。政府は中国の全ての省の住民の中から軍事——革命幹部を養成する、という課題を与えた。この考えは実現された。

一例として、1925年黄埔軍官学校第三回卒業生2500人の構成がどうなっていたかを示そう：江西—115、広西—80、山西—100、江蘇—70、山東—60、福建—55、安徽—48、湖南—750、広東—260、四川—200、湖北

—155, 陝西—150, 河南—150, 浙江—145, 新疆—4, チャハル—2, 台湾—15, 河北—40, 貴州—23, 綏遠—19, 東三省—10, 内蒙古—5。

それ以外に、この卒業生の中には25人の朝鮮人、10～15人のベトナム人が居り、このことは孫文や国民党革命派、中国共産党が幹部の養成に関して近隣諸国家の人民を支援しよう、という意図を持っていたことを表わしている。

1924～1925年に広州に居た同志、ホーチミンが黄埔軍官学校のベトナム人の生徒と関係を保ち、彼らの教育を指導した。

私はたまたまホーチミンとБородинの所で出会った。私は自分がベトナム労働者の未来のリーダーであり、ベトナム労働党の指導者であり、ベトナム民主共和国の初代大統領になる人物に出会っていると、当時、勿論予想できなかった。

生徒の社会的構成は大略、次のようであった：農民—1640, 労働者—100, 商人—400, 学生—400, 兵—10, 官吏—15, 知識人の代表—12。

第四回卒業生の構成もほぼ同じであった。

当時、基幹校の養成は単に南中国で行われただけではなかった。1920年代の中国に於けるコミニストの非常に多くの勝れた将来の指導者が我が国の教育施設で学んでいた。

一例として、中国人民の英雄—葉挺を挙げることができよう。彼は広東のある郡の出身で、孫文の親衛隊の指揮官であった時、他の人々と一緒に教育を受けるためにモスクワへ派遣された。ここ、東方人民共産主義大学、及び軍の学校で、彼は中国革命で演ずることになっている素晴らしい役割を果たすため教育を受けた。

葉挺の英雄的行為については後で詳しく述べよう。本書の中で何度も言及される私の親友Е.В. Тесленкоが1927年、師団長のポストにあった葉挺の軍事顧問だったので、彼について語るができるのである。ここでは、ただ次のことだけ触れておこう。極めて苦しい闘いで見られた葉挺の司令官としての鉄のような意志、柔らかな、知識人風の外貌、優美さ、更に彼の持つ洗練さは妙な取り合せであった。葉挺の外貌は彼の詩的な傾向、彼のロマンチズムをよく表わしていた。当時の多くの中国の知識人と同じように、葉挺も伝統的な詩を書いた。瞿秋白やその他の人々と同じ様に、葉挺もソビエトの首都を第二の祖国と呼ぶことができた。全てのコミニストにとって、入党した場所

が第二の祖国となるのである。

我々は次のように仕事を分担した。Владимир Полякが先任顧問となり、訓練部門を統轄した。彼は直接王柏齡と一緒に仕事をした。Николайと私が生徒の教練、射撃、戦術教育に従事し、この仕事で何応欽將軍と連絡し合った。

我々が先ず直面した最大の困難事は通訳がいなかったことである。我々は英語も中国語も実に下手で、そのため勿論、理論的知識はチェックできず、教員の講義内容に目を通すこともまた、必要な修正をすることもできなかった。まして、我々が独自に何らかの訓練の課程を始めることは不可能だった。教官の知識水準がまちまちだったので、生徒の教育は信じられない程の差が生じた。我々が最初にうまく解決できた仕事は色々の訓練に対する時間を適切に配分したことであった。生徒の教育期間（わずか6カ月）が短くなったことを考慮して、大部分の時間を実際の課業に割り当てた。

しかし、我々はこの問題ですぐに王柏齡將軍の強情さとぶつかった。何らかの事で彼を説得するには多くの時間を必要とした。しかも、常にうまくいくとは限らなかった。

新しいやり方に対して執拗に反対したのは多くの場合、教官であった。あらゆる授業で、言葉だけの授業の方が実物教授より優勢を占めていた。中隊長や小隊長さえもこの欠点を持っていた。しかし、次第に彼らは我々の提案を受け入れ、実行し始めた。一般の指揮官達は比較的民主的であった；全員では無いにしても、多くの者が教官達の「神」のような高慢さに不満であった。それ故、指揮官達は進んで我々の助言に耳を傾け、我々のプログラムに従って仕事をし始めた。

英語に堪能であったБородинが到着したのを利用して、我々は授業時間の割当てに関して蔣介石に提案した。彼は反対せず、我々に同意した。蔣介石は恐らく自分自身の無知を見せたくないのであろう。学校内の組織や教育問題、また後に国民革命軍の最初のいくつかの連隊を組織する際も、殆んど無条件で我々の提案を受け入れた。王柏齡も我々が直接蔣介石のところへ行くのを恐れて、以前より妥協するようになった。

蔣介石は生徒の戦闘訓練には殆んど関心を示さなかった。彼の校長としての仕事は生徒の前で大げさな演説をすることだけであった。実際、彼は次のようなスローガンをかけて演説をした：《打倒帝國主義》《打倒軍閥》《封建領主を一掃せよ》。これらは孫文の三

つの政治方針の精神に合っていた。

例えば、彼は次のように言明した：《私、蒋介石が我々の党の原則を破ったとしよう。この学校の生徒諸君は学校長たる私に反対する行動に出て差支えない。もし、学校長である私がいくつか規律を破ったり、党の原則を裏切ったりした時は、私は無条件にその場で、撃ち殺されねばならない。》

蒋介石は宴会でも、大衆集会でも、あらゆる場所で芝居をした。いつも華麗に話し、革命家、民主主義者としての名声を得ようと努めていた。驚くべき一貫性をもって矛盾したことを言ったり、行ったりした。彼の指導原理は利己主義政治家の冷たい計算、富への要求、権勢欲であった。

何応欽將軍は教育過程の改善に関する我々の提案全てを、何の反対もせず受け入れた。だが、我々がすぐに気がついたことは彼にアドバイスをする時は、ドアが閉められていて、他人がいない時に限る、ということであった。將軍は明らかに《面子》を失うのを恐れていた。私と Николай は彼と顧問室の一つに閉じこもって、数百の中国語の単語、ジェスチャー、教授資料を用い、砂の上での実物説明で我々の考えを彼に説明した。何応欽は教えられたことを繰り返し、彼がそれを理解したと確信した時、我々は右手の親指を上げて《不錯》—《正しい》、《間違いない》或いは《挺好》—《とても良い》と言った。その後何応欽は出て行き、部下の隊付将校、必要な場合は下士官達を集め、今度は自分が教えた。彼の変化を見るのは興味深かった。何応欽は我々の部屋では小学生のように拡舞ったが、そこでは本物の教授のように学んだことを自信満々に伝えた。我々の教えたことを彼がかなり良く他の人々に教えたことは認めねばならない。

顧問達は充実した理論教育と実際の体験とを結合させた指揮官達であった。Владимир と私は兵卒から兵役を始めた。だが、Николай は陸軍幼年学校の生徒から將軍の地位までを経験していた。我々は二つの戦争に参加し、これらの経験を士官学校時代の理論教育で自分のものにしていった。それ故、我々は教室内での生徒の教育課程を編成することができただけでなく、訓練の一つ一つを実際にやって見せることができた。教育の最初の段階で、実際の技術をできるだけ多く生徒に教えるために、色々な事を行った。教練、絶えず精神を集中させること、規律の正しさ、勤勉さ、兵役にまつわる、あらゆる困苦欠乏を克服する覚悟の重要性を知ることが我々は将来の指揮官達に望んだ。

私がすでに述べたように、小隊長や中隊長には実演訓練をする代りに、口だけで一般的な訓練をする傾向があった。この口先だけの訓練に反対して、我々は下士官及び小隊長、後には中隊長に対して系統的教育を実施することができた。その際、彼らが自分自身で行う時、実物教育の方法を間違えないよう要求した。軍事教練の過程で、主として各生徒の個人的技能に注意を払った。更に、中国人が慣れている武器の取扱い方や教練が我々の規定と異っている場合も、我々はこのことを重要視しなかった。これは仕事を複雑にしたいからであった。戦術（戦闘の実行、偵察、情報等）及び射撃教育については、勿論、彼らの貧しい武器を考慮に入れたが、完全に我が国の規定に沿って教育した：一連隊あたりライフル銃、2～4丁の重機関銃、大砲1門にすぎなかった。射撃教育を改善するため、照準をチェックするための、極めて簡単な器具が開発された。そして我々はライフルの照準の合わせ方を生徒に教えた。

戦術教育に於いて、部隊の兵員が少なくても、敵を側面包囲攻撃しなければならぬ時の、火力を組み合わせた急襲のやり方を生徒に教えた。防御の授業でも、極めて高い積極的活動ができるようになり、反撃の際、敵の攻撃に先を越す能力を養った。我々の苦勞は無駄ではなかった。間もなく始まった北伐で、彼らの成果が素晴らしいものであることが示された。

教官達は教育課程全てを実際には我々が指導していることを将校や生徒達に知られるのを恐れたので、我々の仕事がとても複雑になった。彼らとの関係を悪くさせないために、我々は基本的な仕事は全て我々の計画に従って実行したが、表には出ないよう配慮した。非常にゆっくり、日を追って、極めて多様な仕事を自分達の部下に隠すことはできない、という考えに彼らを慣れさせた。そして、訓練のやり方や教育の編成のし方を将校や生徒達に直接我々が教える権利を、やっとのことで獲得した。例えば、私は新しく来た顧問の Н.А. Шевалдин と一緒に、練兵場で生徒一人一人に“躍進”のやり方を見せた。

模範演技、射撃の正確さが生徒に如るべき印象を与え、我々を急速に彼らに近づけた。将校達もまた、実際の技能を見習い、辛い仕事にも慣れて来た。相変わらず、教官達は我々とは少し離れていた。だが、我々は急がなかった。我々は戦術演習を待っていた。そこでは、彼らは実際に力量を発揮し、自分達の《能力》を示さねばならなかった。そして、それにふさわしい機

会が間もなく我々を訪れた。

蒋介石は珠江の東岸に橋頭堡を選び、築くことを我々に要請した。それはやむえず、学校を黃埔島から本土へ移さざるを得ない時の防御のためのものだった。我々は下見のために、中隊長と一緒に教官達も招待した。位置を選択する際、実戦派と理論派との間に論争が燃え上った。我々から実際的な教育を受けた隊長達の方が正しいことが判った。双方のつくった境界線を進みながら、我々は一步一步問題点を検討し、相手に助言を求めながら、両者の土地の長所、短所を示し、知らず知らず、彼らを中隊長達の提案の方へと近づけさせた。

こうしたことがあって後、何人かの教官が戦術の課業に出席するようになった。その後、我々は彼らを教育課程全体の編成の仕事に引き入れ始めた：ある者は課業計画を作成するときの助手となり、ある者は調整者となり、やがて全ての人が参加するようになった。このようにして、我々は色々な戦術上の《流派》間の差異、生徒に与える理論と我々の実際的な課業との間の差異を除去していった。

生徒の軍事教練は政治教育と結びついていた。孫文は国民革命軍の将来の将校に対してそれが重要であることを良く心得ていた。彼は時間を見つけてしょっちゅう学校へやって来て、生徒に話しをした。彼は廖仲愷と共にしばしば、訓練を参観し、殆んど毎回、生徒の前で話しをした。

勿論、孫文も、国民党総書記、広州政府の財政部長の廖仲愷も、毎日生徒に思想-政治教育を施すことはできなかった。この方面については我々も明らかに不足している、と感じていた。しかし、我々は最初のうち、この問題に手を出さなかった。というのは、顧問達を《共産主義の輸出》である、と非難するつもりでいた国民党右派の連中の手に、切札を渡したくはなかったからである。この点で何かやる必要が生じた場合、Бородинが孫文、または廖仲愷に頼んだ。

その後、学校に政治委員のクラスができた。生徒の必修コースの中に、次のような社会-経済諸教科があった：政治経済学、帝国主義論、三民主義と孫文の三つの政治綱領、中国史及び欧米の革命運動史。これらの教科を担当する如るべき教官が学校にはいなかった。時々、汪精衛、胡漢民等のような、国民党の《理論家》がやって来て講義をした。

広州を覆っていた、極めて緊張した状況や国民党内部の闘争の激化によって、生徒の政治教育は複雑に

なった。

国民党内に、大会後、三つのはっきりした形をとる流れが形づくられ始めた：右派、中央派、左派。

国民党員の中に、改組の後でさえも若干の地主、買弁、軍閥が残っていた。彼らは党内の右翼反動派を形成し、公然と大会決議を実質的に無効にするための準備をしていた。

左派は労働者、農民、都市の小ブルジョアジー、民族ブルジョアジー内の進歩層の統一戦線の利害を代表し、帝国主義に反対する闘争の拡大と強化を公然と支持した。

Бородинは3カ月の出張旅行の後広州に戻って来ると、孫文に、中央執行委員会の中から常設の政治局をつくるよう勧めた。

孫文はこの提案に賛成した。しかし、この政治局のメンバーの中に孫文の忠実な協力者である廖仲愷と並んで、汪精衛や胡漢民のような、無原則的な古狸きもまた加わった。

勿論、孫文は二人共無能であることは知っていたが、この政治ブローカーがまさか、自分だけでなく、国家をも裏切ることができる人間だとは思わなかった。当時、汪精衛と胡漢民はとても巧みに革命的言辞でカムフラージュしていたので、例えば汪精衛が二度も中国人民を裏切るとは誰の頭にも浮かばなかった。良く知られているように、後に彼は武漢の《左派》国民革命政府の主席でありながら、裏切って死刑執行人蒋介石の側に移り、彼が1925-1927年の革命を弾圧するのを助けた。

更に10年後、汪精衛は日本帝国主義に対する中国の民族解放戦争の際、南京傀儡政府の主席となった。この時、彼は自分の裏切りを《理論的に》根拠づける試みさえした。そして、中国人民の協力行為を破壊し、日本との降伏による平和を達成しようとした。汪精衛は神戸の国民党組織の集会でなされた有名な大亜細亜主義についての演説を、遠慮なく、乱暴にねじまげた。孫文はこの太鼓持ちを高くは買っていなかった。1924年10月10日《張子の虎》（商団軍を指す。訳者注）の反乱が始まった日に、孫文は蒋介石宛の手紙で次の様に書いている：《異常事態を克服するため、革命委員会を即刻、創らねばならない。汪精衛は恐らく入るべきではないだろう。彼は性格的に妥協しながらであり、物事の決定に際しぐらぐらしている。もし、事態が保持できず、目茶苦茶になったら、我々は勝つか負けるかを考えず、鋭いナイフで絡った麻を断ち切らねばなら



ない。この革命委員会はそうした手段をとることができるものである。汪精衛はこの委員会にはふさわしくない。》

汪精衛を指導部からはずすように孫文が強く主張したことは彼に先見の明があったことを物語っている。孫文が死んだばかりに、この決定は生かされなかった。勿論、胡漢民が最初に革命を裏切るとは、当時誰も予想できなかった。その後、彼は何度も蒋介石と裏切りの謀議を重ねた。尤も、獲物を分配する時、二人はしばしばいがみ合い、互いに悪口を投げ合い、中国の諺《烏が黒豚を嘲笑しても、両方とも黒い》を裏付けていた。コミュニスト達は国民党内部の革命の明白な敵一右派と、同時に偽りの《左派》の隠れた抵抗と闘いながら、広州で活発な革命活動を展開した。中国共産党内部の、第三回党大会に現われた右派及び左派の偏向が未だ除去されていなかったため、彼らの仕事は一層困難になった。

党の第三回大会は右派及び左派の偏向者達の誤った見解を退け、正しい、適時の決議を採択した。

中国共産党中央委員会の決議に基いて、林祖涵、Yun Daiying、周恩来等が国民革命軍の事に派遣された。

中共広東広西委員会書記、周恩来は黄埔軍官学校の政治部副主任を兼任した。

右派の影響を受け、コミュニスト達に対して警戒心を持っていた国民党下部党員を引き入れるために、校内に国民党細胞がつくられ、その中でコミュニスト達の地位が強化された。この系統的な政治活動の成果はすぐに、生徒の生活や学習に現われた。

コミュニスト達が軍隊教育に関して多くの仕事をし、彼らの高い戦闘能力を確かなものにしたことについて、少し早すぎるがここで触れておかねばならない。

多くのコミュニストと我々は長い間、共に仕事をし、第二次東方出撃が終った後に初めて分れた。

コミュニスト達は黄埔で、精力的に、同時にまた慎重に、多数の大衆の政治的ムードを考慮に入れて活動した。ニコлай Терешатовは次の言葉を好んで繰り返した：《妖怪が黄埔を歩き廻っている一共産主義の妖怪が》。

コミュニストのグループが活発に役割を果たしていた政治局の仕事によって、生徒の教育水準が上がり、黄埔軍官学校の規律が著しく強化された。

孫文の主要な顧問という職務のためにモスクワからやって来た П.А. Павлов は学校の状態を詳しく知った

後、一般的にそれに満足した。同時に、彼は教室内の授業と野外教練との結びつきが未だ不十分である、と指摘した。彼の指摘は全く正しかった。何故なら、Павлов が到着するまで、私がすでに述べたような教官達との冷い関係を我々は未だ完全には打破することができていなかったからである。

Павлов は我々に質問した。

一何故、諸君は平服を着ているのか。第一に、平服は野外では具合が悪い。第二に、諸君の服装は諸君の仕事の内容を知ってはならない人々の注意を引くことになる。私は諸君に中国の軍服を着ることを勧める。一私は原則的に、抑々何れの制服にも反対なのです。特に階級章には反対です。一と何故か突然、Николай が皮肉混りに言った。

一諸君は階級章をつけてはならない。それをつけると自分が上官に服従するように束縛されるからである。だが、軍服には着換えなくてはならない。

Павлов が到着したので、Николай Терешатов と Владимир Поляк が彼の機関へ行った。間もなく、Поляк の妻が幼い息子を残して、突然死んだので、彼はソ連へ帰った。私がこの学校の先任顧問となった。新たに到着した何人かの同志が私を補佐するように任命された。

学校の運営のリズムが少しずつ正常化して行った。仕事は軽くなったが、相変わらず通訳の件では頭が痛かった。毎日、私は何応欽と一種の奇妙な言葉で話をした。それはロシア人にも中国人にも理解できなかったであろうが、我々二人は十分に意思の疎通ができた。

私はこれに関連した、滑稽な事件を思い出した。ソ連の練習艦《Воровский》が広州に来ることになった。それはレニングラードからウラジオストークへ航海する途中、黄埔に寄港した。それに関連して、顧問達は生徒達に《Интернационал》の歌を教えるように依頼された。

通信関係の顧問 А.Н. Кочубеев がかつて、音楽学校で学んだことがあったので、この任務は彼に委ねられた。一時間経って、どんな様子が見に行くことにした。想像もつかない程ガヤガヤした声が聞こえた。驚いて行ってみると、《唱歌の先生》Кочубеев は教室の黒板にロシア語で次のように書いていた。《Вставай, проклятым заклеименный……》彼はこの言葉を生徒達に暗記させようと努力していた。これから如何なることが起るか、想像して欲しい。何百人もの生徒はロシ

ア語を全く知らず、自分達には理解できない単語を、しかもこんなに多く、一度に丸暗記しなければならなかった。Кочубеевが《Вставай……》と発音し、この言葉を繰り返すように求めると、《Ай, ай》という叫び声が上り、それは恐らく島中に響き渡ったであろう。

—そんな風にやって、一体何時になったら彼らに覚えさせられるのか。軍艦《Воровский》が出港した一年後か。彼らにメロディーを教えなければ。歌詞の方は恐らく、中国語で知っている人が多くいるだろう。歌いなさい。

Кочубеевは何かもそもぞ呟いた。

—始めてみなさい—と、私は言う。—歌いなさい。

Кочубеевはそうする代りにパイプに煙草を詰めて言った。

—一寸待って。先ず一服しよう。

それから、絶望した人間の様子で、彼は遂に歌い始めた。誰が聞いてもその声は悪かった。なんだ、それなら私だって歌える。……私も歌い始めた。聞こえてくる：3、4人の生徒がフランス語でついて歌った。以前、フランスに居たことがある生徒だ。彼らが他の生徒に何か説明している。それから、数十人の生徒が中国語で歌い始める；事実、大部分の同志が瞿秋白の訳した《インターナショナル》の歌詞を知っていた。半時間経つと、彼らはかなり揃って、且つ、とても熱心に《インターナショナル》を歌った。

クラブから出ながら私はКочубеевに質問した：

—あなたは音楽学校で勉強したにしては、どうしてそんなに歌が調子はずれなのか。

Кочубеевは煙草の煙を吸って、笑いながら答えた。

—その通りだ。私は音楽学校で学びはしたが、それはバイオリンだけだった。

1924年10月8日《Воровский》号が黃埔島に投錨した。我々の赤軍艦隊の乗組員と軍官学校の生徒との間に、心からの出会いが度々あり、また集会や共同のアマチュア演芸会が何度か催された。我々は度々《インターナショナル》を二カ国語で同時に歌った。それは厳かに、且つ壮大に響いた。

練習艦《Воровский》号の乗員の中に、将来の艦隊司令官が何人か居たことを思うと、興味深いものがある：П. Смирнов-Светловский, Ю.А. Пантелеев, И.С. Юмашев

提督。20年後に、И.С. Юмашев 提督が太平洋艦隊を指揮し、ソ連陸、空軍と協力して、帝国主義の侵略から中国と朝鮮を解放するのに参加するようになるうとは、誰が知り得たであろうか。

《Воровский》号がウラジオストークに向けて出港した数ヶ月後に、《歌の先生》А.Н. Кочубеев もまた祖国へ帰った。彼が帰国する前、私は彼の仕事について次のような批評を彼に伝えた。それは大部分の軍事顧問の性格をよく表わしているので、全文をここに引用しよう：

《同志、Кочубеев は初めてできた黃埔軍官学校の通信のクラスの顧問であり、仕事の厳しい条件—通信に多少とも精通している中国の将校がいないこと。中国語が解らないこと—にも拘らず、短期間に通信関係の教官—将校を養成することができた。彼が施した教育は単に技術面だけではなかった：彼らに通信の戦術をかなり良く教えることさえもでき、戦術面の課題をやり遂げた。彼の弟子達は間もなく、戦線に赴いた。そして戦場では、彼の仕事の成果が他のどこよりもよく現われた。中国人の生徒に対するКочубеевの態度はソフトで気が利き、彼らはそういう彼を受するようになった。我々軍事顧問にとって、Кочубеев は真の同志であり、友であった。勤務の関係では、彼は規律をよく守り、確実に、非の打ちどころのない几帳面な人であった。

祖国へ帰ったКочубеевの代りに通信の顧問になったのはМ.И. Дратвинであった。

☆ ☆ ☆

ある晩、黃埔島の我々の家のドアが開き、Бородинの家族や孫文の政府の何人かの大臣の家族がガタガタと現われた。我々はすぐに気がついた：広州でまた、良くない事態が生じた。反動派の軍隊が攻撃してきて、不安になる度に、孫文や彼の大臣達は家族と共に、モーターボートに乗り、いつも急いで、広州の黃埔の生徒の保護の下にやって来た。避難者はいずれも自分の臨時の住居を知っていた。我々もまた、それを知っており、やって来た人々のために、すぐに部屋を明け渡した。危険が過ぎると、彼らは自分の所持品全部を持って、広州に帰って行ったものだった。